

海洋ゴムと外来種駆除

便ノ山の活動10年で成果

紀北町便ノ山で5月30日、特定外来生物のオオキンケイギクの駆除作業があった。有志と企業の共同作業で、道端に生えた草を根から抜き取った。

オオキンケイギクは北米原産の多年草。初夏に鮮やかな黄色い花を咲かせる。明治時代に日本に入り、觀賞や緑化のために全国に広まった。繁殖力が強く、希少な在来種を駆逐し、生態系への影響が危ぶまれることから、環境省は特定外来生物に指定して、栽培や譲渡などを禁止している。

駆除作業は世界遺産の熊野古道開闢跡と清流鮎子川に外来種が入り込むのを防ぎたいと、まちづくり団体の「交流空間みるま」が始め、今年で10年になる。



オオキンケイギクを抜き取って駆除する参加者たち

駆除作業には、田上至代表ら7人のメンバー

と、今年初めて海洋ゴムの社員12人が力を合わせた。同社は、外来種の持ち込みによる生態系のかく乱など生物多様性の危機を憂慮し、動植物の生育環境を本来の姿に戻すグロバールな取り組みを支援することになり、町内で統一している駆除作業に協力を申し出た。

参加者の多くは中国人実習生で、権兵衛の里駐車場から便ノ山浄水場付近の間を往復し、鮎子川の土手や県道の路肩に残

るオオキンケイギクを採した。

花はほとんど咲き終わっていて、草丈20センチほどのものがわずかに見当たっただけだったが、社員たちは一つも見落とすまいと目を凝らし、手にした草抜き道具で根っこから抜き取り、ビニール袋に回収した。別のグループは、便ノ山橋に近いJR踏切付近の駆除作業に精を出した。

1年目の駆除作業から参加しているメンバーの一人は「これまでの作業で確実に花は減っている

が、小さいものがまたある。(外来種を)知らない人が多いので周知していくために継続している」と話した。海洋ゴム業務課の中村優太さんは「こういう活動もあることを勉強してもらいたい」と、環境問題に対する社員の意識の高まりを期待していた。